

医療法人元生会 愛生病院

介護課通信

1 はじめに…

今年度の勉強会係りでは、介護に携わるうえで、知ってもらいたいこと！知識として、ひとつの情報として得たことなど、介護だけではなく、他職種の分野も含め、様々な情報を発信できればと思い、介護課通信を発行していこうと思っています。日々、業務に追われ、時間がない中で、改めて時間をとることが難しいのが現状です。通信を通して介護職全員が共通の認識を持ち、患者様に安定したケアの提供ができるようになればと考えています。難しいことはできませんが、小さなことから少しずつ学んでいけたらうれしく思います



☎078-8340

旭川市東旭川町共栄 223 番 6

看護部病棟介護課

文責：看護部長 五十嵐しのぶ

Tel 0166-34-3838

Fax 0166-34-2867

ホームページ www.aisei-hp.jp

あたたかな心のふれあい
HEART-WARMING



2 笑顔も技術の一つ…

先日、ハートネットTV（教育テレビ）という番組に、女優の北原佐和子さんが出ておられました。北原さんは、10年前、43歳の時に介護の世界に足を踏み入れ、女優業と並行して現在にいたっています。3年前介護福祉士、昨年には2回目の挑戦で介護支援専門員（ケアマネジャー）の資格を取得されたそうです。デイサービスで働く北原さんは、ご利用者さんと嚙下体操をしたり、食事を一緒にされたりして、楽しそうで、常に笑顔でした。話されてこちらの関わり方次第で、ご利用者さんの気持ちも表情も変わる。と言われていました。現場で働く者だからこそ分かることですよね。

何気ない表情で、当たり前のように、当たり前に出れないのが「笑顔」だと思います。患者さんに接する時、私は「笑う」ことと合わせて、状況に応じた対応ができればと思っています。何もないのに、いつも笑っていると「変な人」と思われるかもしれないので、そこらへんは、気を付けないといけません。

これからも、誰が見ていても見ていなくても、誰が聞いていても聞いていなくても、患者さんに対し、人権を尊重した対応で、安心していただけるような安定したケアの提供ができるよう、皆さんと共に勉強をしていきたいと思っています。皆さんのご意見、ご感想はとても貴重です。今後ともご協力とご指導のほど、よろしくお願ひします。

裏面の詩を読んで・・・

この詩を読まれて、皆さんはどのような感想を持たれたのでしょうか？感じ方は人それぞれだと思います。著者は本文の中で「老人を価値のある人とみなし、尊敬してくれる人がそこにいなければ、人生は、彼らにとってわびしいままであろう。」と書いています。

今、この病院での生活を余儀なくされることなんて、患者さんの誰もが思わなかったことだろう。と思うと、自分がもし患者の立場なら、こう関わってほしいと思う関わり方で患者さんに接しているだろうか？こちらの都合で、患者さんの意志を無視した、乱暴な接し方をしていないだろうか？自分優先で人権を無視した対応はしていないだろうか？患者さんに対し、自分の尺度でものを見て、押し付けてはいないだろうか？など、患者さんにどう関わればよいのか、考えさせられます。

今年度看護部目標の一つである

『患者・家族の目線に立ちケアを提供するチームを築く』を考える時、患者さんに対し、介護員として自分の言行動を考える一つの指針になればと思います。

勉強会係り A・M



Nursing care communication.



第1回目は… ある老婦人の残した詩をご紹介します。
『私は三年間老人だった～明日の自分のためにできること～』の中から

まず、最初に…

認知症の講習会などに参加されたことがある人は、一度は目にしたことがあるのではないのでしょうか。また、多くの看護師さんが、目にしているのではないのでしょうか。私自身、認知症に関わる講習会の中で、過去に3度ほど目にしたことがあります。

著者パット・ムーア、木村治美訳『私は三年間老人だった～明日の自分のためにできること～』の中で紹介されています。世界中で多くの感銘を受けた、その詩は、イギリスからのもので、アシュルディー病院の老人病棟で亡くなった、老婦人の持ち物の中にあつたというもの。のちに病院の看護師が詩のコピーを手紙に同封し、著者に送ったものだそうです。

※できれば、老婦人になったつもりでゆっくりと読んでみてください。

目をあけて、もっと私をよく見て

何が見えるの、看護師さん、あなたには何が見えるの
あなたが私を見る時、こう思っているのでしょうか
気むずかしいおばあさん、利口じゃないし、日常生活もおぼつかなく
目をうつろにさまよわせて
食べ物をぼろぼろこぼし、返事もしない
あなたが大声で「お願いだからやってみて」と言っても
あなたがしていることに気づかないように
いつもいつも靴下や靴をなくしてばかりいる

おもしろいのか、おもしろくないのか
あなたの言いなりになっている
長い一日を埋めるために、お風呂を使ったり食事をしたり
これがあなたが考えていること、あなたが見ていることではありませんか
でも目を開けてごらんさない、看護婦さん、あなたは私を見ていないのですよ
私が誰なのか教えてあげましょう、ここにじっと座っているこの私が
あなたの命ずるがままに起き上がるこの私が
あなたの意志で食べているこの私が、誰なのか

私は十歳の子供でした。父がいて母がいて兄妹がいて、皆お互いに愛し合っていました
十六歳の少女は足に翼をつけてもうすぐ恋人に会えることを夢見ていました
二十歳でもう花嫁。守ると約束した誓いを胸にきざんで私の心は踊っていました
二十五歳で私は子供を産みました
その子たちは安全で幸福な家庭が必要でした
三十歳、子供はみるみる大きくなる
永遠に続くはずのきずなで母子は互いに結ばれて
四十歳、息子たちは成長し、行ってしまった
でも 夫はそばにいて、私が悲しまないように見守ってくれました
五十歳、もう一度赤ん坊が膝の上で遊びました
愛する夫と私は再び子供に会ったのです
暗い日が訪れました。夫が死んだのです
先のことを考え - 不安で震えました
息子たちは皆 自分の子供を育てている最中でしたから

それで私は、過ごしてきた年月と愛のことを考えました

いま私は おばあさんになりました。
自然の女神は残酷です
老人をまるでばかのように見せるのは、自然の女神の悪い冗談
体はぼろぼろ、優美さも気力も失せ、かつて心があつたところには今では石ころがあるだけ

でも この古ぼけた肉体の残骸にはまだ少女が住んでいて
何度も何度も私の使い古しの心はふくらむ
喜びを思い出し、苦しみを思い出す
そして人生をもう一度愛して生き直す
年月はあまりに短すぎ、あまりに速く過ぎてしまったと私は思うの
そして何ものも永遠ではないという厳しい現実を受け入れるのです

だから目を開けてよ、看護婦さん
- 目を開けてみてください
気むずかしいおばあさんではなくて、「私」をもっとよく見て！

